

るのは、他の和讃は引いていたことを証明するものであろう。自分は未だ空也和讃の正確な古写本を見ることができず、親鸞聖人が自作の和讃を「引」いておられたという確証を見出すことができずにいるのであるが、三帖和讃の先蹤について大体の見当を述べて、諸賢の御批判を乞う次第である。

参考―拙著「和讃史概説」、拙稿「金沢文庫本伽陀集」、「日本仏教讃歌」、「三帖和讃の本文について」、「移動する和讃」、「時宗の本作の和讃」。

## 安楽集の方法論的一考察

橋 本 芳 契

安楽集一部、上下二巻、唐の道綽 (A. D. 563-645) の作。禪師を中国浄土教では曇鸞に次ぐ「五祖」中第二位の人とし、またわが浄土真宗では「七高僧」の第四にかぞえるのは、ひとえに師にこの一集あつたからである (註、五祖の第三以下は善導、法照、少康)。しかるに安楽集の実際を見ると、その構成は全十二大門を上巻に三大門、下巻に九大門にして分ち説いたもので、十二という数には体系的に竜樹の十二門論を想わせるものがある。師にもまた恐らくその教源を遠く竜樹に仰ごうとするものがあつたに相違ない。安楽集は最も多くインド伝来の経律論書を重んじこれを引くのであるが、中で無量寿経の引用は、第五・第十二の両大門以外すべての大門において成され、

累計三十二回にのぼる。集そのものは観経玄義のごときであつたと解されるが、観経からの引用は第一・二・四・五・六・八の各大門に一、二回ずつ計八回なされるのみであり、従つて大経による観経の弁証が安楽集の趣意であつたという古来の説も、こうした外形からもその真なることが伺われる。引用書で他に多いのは涅槃經の十五、智度論の十二、華嚴經の七、維摩經・浄土論の各六等に過ぎず、総して明治三十一年安居に本集を講じた竜山慈影嗣講の數えたごとく五十六部 (安楽集講録、上、二四右、但第十二席) の經 (増一阿含等小乘三、大乘三九、律 (一、但四分律)、論 (九) 等の引用であるが、大部分は大乗經で、しかも初四大門中の引用が全引用一六一回に對する一八回、つまりその七割までを占めているのである。安楽集の題号が、代表的な註釈家により「知<sub>レ</sub>所求土、須<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>願行<sub>一</sub>、故<sub>ニ</sub>挙<sub>二</sub>安楽<sub>一</sub>、拾<sub>二</sub>經論文<sub>一</sub>、記<sub>二</sub>之筆点<sub>一</sub>、故云集矣」 (良忠、安楽集私記、上巻) と説明されたに確かなように、一集の要旨は安楽の土を求め、これに往生を期する要術の記文をさぐることであつた。その点は親鸞が教行信証、具に顯浄土真実教行証文類 (六巻) を成したと同趣意であつたとしてよい。但だ道綽は第一大門に九支門 (教興所由・說聽方軌・發心供仏・宗旨不同・得名各異・說人差別・略明身土・風聖通往・三略撰不) を総標し、うち得名各異と說人差別の二を除いた他の七支門を別標した。すなわちこれらの標示が一集の綱格を示すものである。別標に除かれた二支門は、観経の諸経中における特色を明らかにし、「仏説」としてのその地位を定める問題であつた。下巻に入り第四大門で曇鸞は「決衆疑難」と「勸帰道俗」 (いずれも

講録のことば)の化他行者であるとして別嘆されたが、そこに浄土門の伝統と系譜が明示されたと言える。当代浄影・天台・嘉祥等聖道諸師が各観経疏を成せるに対抗し、道綽がよく竜樹・世親以来の念仏の大道統を保全し推進し得た功績は、親鸞が「道綽決聖道難証、唯明浄土可通入」と歌い、「譬師のおしへをうけたへ、綽和尚はもろとも、在此起心立行は、此是自力とさだめたり」と讃えたに最も明らかである。中でも第十大門では、一方で大経を引き他方で回向義を説いたが、のち親鸞が「教」とは大経であるとし、また真実浄土一宗の基本が往還の二回向にあると示した思想源の一半が安樂集にあったことを知らしめられるのである。道綽が曇鸞に承けたこの回向義はさらに世親の願生偈にまで溯り得るものであり、願生偈の五念門(礼拝・讃嘆・作願・觀察・回向)には、ながきに亘る浄土行業の実修が封じられたものであろう。近く維摩経の仏国品第一の経説には、宝積長者の見仏に伴う五念門行の展開がさながら見られる。もとあったとされる世親の維摩経論は今見るべくもないが、恐らく古くインドには仏国品ごとき内容の経が独立別行していたものでもあろう。しかしまた、五念の前四が往相として不住世間の不退智慧道たり、後一が還相として不住涅槃の回向方便慈悲道たるどころ、維摩経菩薩行品第十一における不尽有為・不住無為の中道義に相応するもので、それは仏国品に次いで方便の一品あり、そこに維摩居士の初登場を見たことと共に、また維摩一經のおのずからなる形成たるをうなずかされる。それにしても回向義は既に「回向心是菩薩浄土、菩薩成仏時、得一切具足功德国土」(仏国品)と明示され、また回向

(pari-ṇāma)の原義たる「転変」を含めての四秘密(四依 cat-vitvobhisaṇḍhayaḥ)の説が「依於義、不依語。依於智、不依識。依了義経、不依不了義経。依於法、不依人」(法供養品第十三)として見られることも維摩経の本来深く藏した浄土教教理の基底面の露呈である。転識得智が全仏教の根本趣意とすれば、回向一門こそ仏陀正覚の直証であろう。即ちまた九方便の最後が回向方便たるゆえんでもある。安樂集は三十八番の料簡を用いて、一方三論の有相見の見方、他方撰論の別時意の見方からそれぞれ浄土教を弁証してそれが本願力回向による時機相應の如実大道なるを真に論定したもの、方法論的にはすべて客観主義的であるが、そこにかえて「資性温厚」(金沢大学院鳥文庫所蔵写本五冊本逸名安居講録「安樂集問書」参照)とされた集主の宗教味ゆたかな風格をしのぶことができるようである。

### 『教行信証』教巻標準の文の

在り方とそれについての思索

日 野 環

聖人の『教行信証』の「教巻」の「標準之文」の在り方は――

「願浄土真実教文類一

愚禿釈親鸞

大無量寿経真実之教

浄土真宗

謹按浄土真宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向有真実